

下出書店に関する一考察

朝井 佐智子

要旨

下出義雄が創設したとされる下出書店は、森靖雄が「幻の下出書店」と表現したように資料も少なく、不明な部分も多い事業である。所在地は「東京青山原宿百七十番地十六号」、「東京市神田區錦町三丁目十八番地」、「東京市麴町區永田町二の一」の三か所であった。創業時期は様々な記述があり不明な点が多く確定はできなかった。初めての出版物は、1921（大正10）年4月10日発刊の武者小路実篤著『友情』である。また、出版事業のみを行っていたとされていたが、古書販売業と貸本業も同時に行っていたことが判明した。

1. はじめに

下出義雄（1890-1958、以下は義雄）は、名古屋紡績（現・東洋紡株式会社）専務、木曾川水力支配人、大同電気製鋼所（現・大同特殊鋼株式会社）など複数の企業経営に参画し、大正期から昭和初期における名古屋経済界の牽引者として活躍した実業家として知られている。事績はそれにとどまらず、東邦商業（現・東邦高等学校）の校長・理事長を務めた教育者として、さらに第21回衆議院議員総選挙で当選し政治家としても活躍した人物である。

この義雄に関する研究業績は、父の民義、弟の隼吉に比して、さほど多くない。『東邦学園下出文庫目録』（愛知東邦大学地域創造研究所）¹⁾で年譜は確認できるものの、まとまった伝記や評伝はなく、義雄が役職を務めた各企業の業績研究や社史に略歴が紹介される程度である。近年、愛知東邦大学地域創造研究所『戦時下の中部産業と東邦商業学校 下出義雄の役割』（唯学書房 < 地域創造研究叢書 > 2010年）²⁾や「下出義雄」（『東海の異才・奇人列伝』風媒社、2013年）³⁾によってその人物像に光があたりつつあるが、義雄の生涯には未だ空白部分が多く、解明が待たれるところである。特に義雄が創設したとされる「下出書店」は、森靖雄が「幻の下出書店」⁴⁾と表現したように資料も少なく、不明な部分も多い事業である。下出書店は、義雄が東京商科大学貿易科を卒業後⁵⁾、東京で創業したとされる出版社である。義雄にとっては、下出書店の経営が初めての経済活動であり、社会に踏み出した第一歩目ともなる活動である。それ故、この下出書店の業績を考察することは、下出義雄の生涯における経済活動を検討する上で新たな知見をもたらすと考えている。おそらくこの下出書店の経営経験が、帰名してからの名古屋経済界での活躍に影響があったことは間違いない。

また、下出書店は、「当時日本の学界で、研究を欲する人があっても営業的になりたないために出版すべくして出来なかった書籍を、全く採算を度外視して出版した」⁶⁾とあるように、埋もれた研究者を発掘し、出版機会を供することによって広く業績を伝える役割も果

たした出版社でもあった。

本論文では、下出書店の全容を解明しようという試みをしているが、調査の余地を残すものの、現段階での調査結果をまとめ、基礎的な部分を明らかにすることを目的とする。なお、下出書店から出版された出版物の分析、著書の分析等については、別稿で整理する予定である。

2. 出版社の所在地に関して

下出書店の概要を説明するにあたり、所在地から特定したい。発行所がすなわち出版社の所在地と断定するのは短絡的な考えかもしれないが、下出書店の出版物の奥付に記載されている発行所の変遷をたどることによって所在地を考察していきたい。奥付によると「東京青山原宿百七十番地十六号」、「東京市神田區錦町三丁目十八番地」、「東京市麴町區永田町二の一」この三か所の記載が確認できる。この場所に、実際の下出書店が所在し、社員が常駐しながら活動をしたかは定かではない。また、下出書店の経営を誰が主として行っていたかという点に関しても、確証を得ることができる資料は現在のところ存在していない。これらの問題点も含め、発行所に記載された場所から推測できることを手掛かりにアプローチしていく。

(1) 東京青山原宿百七十番地十六号

最初に奥付に見られる住所が「東京青山原宿百七十番地十六号」である。現在確認できる最初の下出書店出版物、武者小路実篤著『友情』より古い出版物がなく、これ以前に下出書店が営業していなかったとすると、この青山原宿の地が下出書店発祥の地ということになる。青山原宿町という地名は、『角川地名大辞典 13 東京都』によると「江戸期～明治5年の町名。(中略) 現行の北青山三丁目1番の一面から北の渋谷区へかけてのあたり」⁷⁾とある。下出書店が活動をしていた大正期には青山原宿という地名は存在しないことになる。現在でも往々にして町名変更となった後にも、旧町名の方が馴染みやすく使い続けているという例があるように、青山原宿の方がなじみ深く当時の人々には容易に想像できる地域であったのであろう⁸⁾。いずれにしても、青山原宿が現在のどの地点であるかは、断定できない。

では、この地はどのような経緯のある場所なのであろうか。創業地であり、「下出」の名を冠することから、義雄の居住地、または父・民義か弟・隼吉の居住地であったと想定することが当然であろう。しかし、ここに「東京青山原宿百七十番地十六号」の住所地に関して興味深い新聞記事がある。「島崎藤村氏の「新生」に表れた心を體して毎月一回会合するもので第一回を二月一日午後一時から青山原宿 170 杉原三郎方に催すと」⁹⁾、「「新生」会第二会例会 来月七日午後五時青山原宿一七〇ノ一六杉原方に開催 志垣寛氏の講話がある」¹⁰⁾とある。この二つの記事から「東京青山原宿百七十番地十六号」は杉原三郎の自宅であるということが判断できる。杉原は、「往年、大杉栄など、同時代に社会運動をやった杉原三郎氏」¹¹⁾とあるように、『人格主義の否定』¹²⁾、『社会主義の価値哲学』¹³⁾の著書や『社会主義倫理學研究』(のちに『共産主義研究』に改題)の個人雑誌発刊など社会主義運動に傾倒した人物であり、『日刊丸之内新聞』や『日本産業報国新聞社』を主宰するなど出版業界に造詣の

深い人物である。杉原三郎なる人物と下出書店との関係は不明な点も多く、調査の余地はあるが、判明している部分は、次稿で詳述するのでここでは、触れない。いずれにしても、下出書店の創業は、杉原三郎の自宅を拠点として開始したと考えられる。

(2) 東京市神田区錦町三丁目十八番地

次に移ったのが「東京市神田区錦町三丁目十八番地」である。1921（大正10）年12月30日発行の『プロレタリアの哲学』までは、青山原宿が発行所とあり、1922（大正11）年02月05日発行の『企業形態論』からは、神田区錦町の住所地となっていることから、1922（大正11）年初頭から神田錦町で活動し始めたものと推測できる。青山原宿同様、この地の選択理由を記述したものはない。現在の神田税務署の近辺であろうか。では、出版社活動に重点を置きたいのであれば、いかなる理由で神保町近辺に拠点を構えるのではなく、神田錦町を選択したのであろうか。

義雄にとってこの地に馴染みがあったためというのが、一番の理由として推測できる。義雄は、愛知一中、神戸高等商業学校（現、神戸大学経済学部）で学んだあと、東京高等商業学校（現、一橋大学）に進学している¹⁴⁾。東京高等商業学校は、1875（明治8）年、森有礼が私設したわが国最初の商業教育機関の商法講習所が前身で、1885（明治18）年文部省の直轄となり、東京外国語学校を合併して開設された学校である。現在、一橋大学に学校名は変更されているが、この一橋の由来ともなったのは、神田区一ツ橋通町一番地¹⁵⁾で開校していたことに起源する。1922（大正11）年当時は、下出書店の神田錦町と東京商業学校の一ツ橋通りは目と鼻の先に位置していた。義雄が上京時から住まいとしていた場所に下出書店の所在地を移転したと考えるのが妥当であろう。但し、東京商科大学在学中の義雄の住まいを記した書簡等は現在のところ発見できていない。また義雄の卒業者名簿¹⁶⁾にも、大正七年七月貿易科卒業とあるのみで、住所地の記載はない¹⁷⁾。住まいとしていなかったと仮定しても、神田錦町は、学生時代に散策したであろう周知の場所であり、地の利は十分にあった地域だったのであろう。

ところで下出書店以前の明治期以降の人々にとって、「神田区錦町三丁目十八番地」の地は、「錦輝館」が存在していた場所として、馴染みの深い場所であった。「錦輝館」とは1891（明治24）年に開業した集会所で、政治演説や演劇、決起集会¹⁸⁾まで様々な用途で多くの人が会せる場所として活用されてきた施設である。特に、エジソンが発明したヴァイタスコープによる映画を「電気活動大写真会」と銘打ち上映会を行った場所として¹⁹⁾、東京における最初の映画興行の地として知られている²⁰⁾。多くの人が利用した「錦輝館」も、1918（大正7）年8月19日に火災により全焼したことによって幕を閉じる²¹⁾。その「錦輝館」の跡地が下出書店の二番目の拠点となったのである。焼失直後の1918（大正7）年から義雄が神田錦町の地で居住または活動を開始していたのか、それとも1922（大正11）年初頭になって、下出書店の所在地の変更とともに義雄自身も移転したのかは、不明である。しかし、「神田区錦町三丁目十八番地」で、確かに下出書店は活動をしていたのである。城山三郎『創意に生きる 中京財界史』には「錦輝館のビルの三階建てのビルの一階を借りて下出書店は開始した」²²⁾とある。この言説を信じれば、錦輝館は火災後、ビルに建て直しその場所で下出書店

は営業していたということになる。また、三階建てのビルの二階部分も利用していたとの記述もある。藤原勘治が弟・隼吉の死を悼む遺稿集に寄せた文章のなかに、「神田錦町の下出書店の二階で、度々集つまったものです。」²³⁾と記している。つまり、三階建ての建物のうち、一階と二階を下出書店の関連で利用していたということになる。

この「神田錦町」の下出書店も関東大震災の発生により焼失し、移転せざるを得なくなる。1923（大正12）年9月1日午前11時58分に、相模湾を震源として発生した大地震は、関東一円に被害を及ぼした。神田錦町も例外でなく、火災により壊滅的な状況となった。『災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 1923 関東大震災 平成18年7月』の内閣府被害状況報告²⁴⁾でも、神田区は、全面積3073.898㎡のうち2855.732㎡が焼失し、割合にすると93.88%が焼失したと報告されている。下出書店のあった地域も軒並み焼失しており²⁵⁾、下出書店一棟のみが被害を受けなかったとは、到底考えられない²⁶⁾。「神田に創始して出版もいろいろした。主に社会学会系統のものだが、文芸物や外国文学の翻訳類もあった。それが大正十二年九月の震災によって、永田町の隼吉宅も下出書店も全焼してしまった。」²⁷⁾と父・民義が回顧していることは、これを裏付けるであろう。

青山原宿から神田錦町に移り、下出書店の安住の地として、本腰をいれて活動していくかにもえた下出書店も、関東大震災という不測の事態によって移転を余儀なくされたのである。

（3）東京市麴町区永田町二の一

次に、下出書店出版物の奥付発行所に記載されている住所として確認できるのが、「東京市麴町区永田町二の一」である。現在の首相官邸や、内閣総理大臣公邸などの建ち並ぶ地域に下出書店が存在していたということは、にわかには信じがたい。しかし、同じ住所に、囲碁の日本棋院が大正期に所在していたという記述もあり²⁸⁾、現在の官庁のみの地域というより民間施設も建ち並ぶ地域であったことが推測できる。この永田町の住所は、弟・隼吉の自宅であったことは確定できている。

ここで少し、弟・隼吉について紹介しておく。1897（明治30）年、名古屋で生まれ、明倫中学校、第八高等学校と進学し、1920（大正9）年に上京し、東京帝国大学文学部に入学する。社会学科卒業後、引続き大学院に入学し、1923（大正12）年関東大震災直後に大学院を満了する。日本社会学会の設立に尽力し、僅か10年足らずの研究期間で100本あまりの論文を執筆し、日本の社会学の祖とも言われる人物である²⁹⁾。

前述したように、「東京市麴町区永田町二の一」の住所は、隼吉の自宅間違いなし。1922（大正11）年1月に、それまでの住まい、東京市外巢鴨町一二〇〇番地から転居し、永田町を自宅として住み始めている。奇しくも下出書店が青山原宿から神田錦町へと移転した時期と同時期である。その後関東大震災で自宅が全焼し家財も一物も残らず焼失した³⁰⁾とあるが、自宅として再び建て直し、臨終の地も、この永田町の自宅であった³¹⁾。

永田町の住所が記載されている下出書店の出版物は全て『社会学雑誌』に限られている。『社会学雑誌』が、隼吉が創立に尽力した日本社会学会の機関誌であることと、この住所地が隼吉の自宅であるということから、経営も義雄から弟・隼吉に移譲されたであろうということが、発行所所在地の移転から推測できる。

下出書店の出版地、場所の記録でたどると「東京青山原宿百七十番地十六号」、「東京市神田區錦町三丁目十八番地」、「東京市麴町區永田町二の一」この三か所が所在したことになる。実際に、この所在地で店舗を開いて活動していたかどうかは疑問ではあるが、少なくとも下出書店に何等かの形で関わりのあった場所には違いない。また、現在まで、創業地が「青山原宿」と「神田錦町」の二通りの記述があるが、筆者は、現時点では、以上の点から青山原宿を創業の地と定めたい。

3. 下出書店の創業時期について

次に、いつから出版業を始めたかという問題を考察してみたい。

大正期の出版物は、明治の初めに定められた出版法規によって規制されており、当然、下出書店もこの法に則り内務省に届出を行っていたものと思われる。

「出版法」は、1893（明治26）年4月13日公布された法令で、

第1条 およそ機械舎蜜其の他何等の方法を以てするを問わず、文書図画を印刷して之を発売し、又は領布するを出版と云い、其の文書を著述し又は編纂し若は図画を作為する者を著作者と云い、発売領布を担当する者を発行者と云い、印刷を担当する者を印刷者と云う。

第3条 文書図画を出版するときは、発行の日より到達すべき日数を除き、三日前に製本二部を添え内務省に届出べし。

とある。発行者は内務省に、出版届とともに、製本された本を2冊届け出ることが定められていた。下出書店も発行者であるので出版する毎に2冊の本を内務省に提出していたはずである。この届出の日付の一番古いものを確認すれば、下出書店の出発点はある程度確認できるはずである。残念ながら、国立公文書館には、内務省の出版届の保管はなく、今回は、義雄の経歴、新聞記事、義雄に関する記述の抜粋などから特定してみたい。

(1) 1912（大正4）年創業

義雄の経歴のうち、いつの時期から下出書店を始めたのであろうか³²⁾。「大正四年に一ツ橋を出た彼は、青山に『下出書店』といふのを開いた」³³⁾とあり、この記述が正しいとすれば、何ら問題はない。森も、「下出義雄が東京・青山に「下出書店」を設立したのは1915（大正4）年、26歳のときであった」³⁴⁾と指摘している。確かに、1915（大正4）年7月に、東京商業学校貿易科を卒業しており、卒業後に事業として始めたということは可能である。しかし、1915（大正4）年に創業したのであれば、最初の出版物が確認される1921（大正10）年4月までの間、義雄は何をしていたのであろうか。出版物の準備という考えも可能であるが、6年という月日は、あまりにも長すぎるのではないであろうか。収入もなく過ごしていたとすれば、当然のように、父・民義より名古屋帰還を強いられたであろうということは想像に難くない。但し、卒業後すぐに名古屋に戻ることはなく、しばらくの間、東京に留まっていたことは確認できる。

大同製鋼の生産責任者下出義雄氏は今年五十五歳の働き盛り、併し中京財界としては長老格という所、同氏は貴族院議員下出民義翁の長男で、神戸高商から東京高商専攻科に

学んだが卒業に際し故福田徳三博士から研究室に残り学者として立つてはどうかと慫慂されたという挿話もあるほどの秀才であった。しかしその半面運動神経も発達しており、少年野球から始まって、愛知一中、神戸高商、東京海上勤務時代を合せると選手生活は十年以上に及んでいる。東京海上に勤務した二年間は故各務鎌吉氏の秘書として社長学を修めてから大同電気製鋼所に移って取締役支配人、名古屋紡績専務、名株理事長と極めて順調な人生行路を進んで来た

『日本産業経済新聞』1944（昭和19）年2月18日³⁵⁾

この『日本産業経済新聞』には、大同製鋼の社長としての義雄の事績が掲載されている。東京海上（現・東京海上日動火災保険）で、故各務鎌吉氏の秘書を二年間務め社長学を修めてから大同電気製鋼所に移ったとある。各務鎌吉は1888（明治21）年に東京高等商業学校（現一橋大学）を首席で卒業し、三菱財閥で中心的に活躍した人物である。おそらく一橋の同窓関係で、各務の社長秘書になったのであろう。

東京海上に所属していた1915（大正4）年から1917（大正6）年までは、東京に在住していたことになろう。ここから二つの推測が可能である。一つは1915（大正4）年に下出書店を創業し、同時に各務鎌吉の秘書をしていた可能性、もう一つは、秘書の職を辞したあとの1917（大正6）年から下出書店の経営を始めたという可能性である。さりとてこの仮定も、この時期に、下出書店から一冊も出版されていないことから、存在していたことの確証にはならない。

存在していたことを示す記述としては「もともと息子が、本屋なんぞをやって居るのは気に喰わない、これを本意なく眺めてゐた父親民義翁は、彼を無理にも引戻して、自分の睨みの利く名古屋紡績の専務さんにしたわけであった。」³⁶⁾とある。義雄が名古屋紡績所専務取締役就任したのは、1920（大正9）年10月のことであるので、それ以前に下出書店は存在していたという可能性も十分考えられる³⁷⁾。

（2）1921（大正10）年4月頃創業

これまで、義雄に関する回想記述から、創業時を1915（大正4）年から1920（大正9）年10月までのいかなる時点にその可能性があるかを推測してきた。しかし、これらは実証できる資料がなく、本人の記述でもなく記録として正しいかは判断しかねる。そこで現存する出版物から創業日を探るとすれば、どうであろうか。現在確認できる下出書店の出版物の最初は、1921（大正10）年4月10日発刊の武者小路実篤著『友情』である。『友情』は、脚本家の野島と新進作家の大宮との友情と、二人と杉子をめぐる恋愛を描きだし、時代を超えて広く読まれている武者小路文学の代表作³⁸⁾ともいえる作品である。下出書店の第一作目の出版が、なぜ『友情』であったのかは、不明であるが、確かに下出書店から『友情』が出版されていることは、武者小路実篤研究者二松学舎大学 瀧田浩氏の記述でも明らかである。

「友情」は、一九一九〔大正八〕年十月十六日から十二月十一日まで『大阪毎日新聞』夕刊に連載されました。その後、一九二〇〔大正九〕年四月に以文社から、翌年四月に下出書店から、同年五月に叢文閣から、いずれも実篤の親友岸田劉生の絵による装幀で単行本が刊行されました。（瀧田浩）³⁹⁾

新聞連載の小説を以文社、下出書店、叢文閣という三つの出版社から出版されたとあり、下出書店から出版されていること示されている。この下出書店版『友情』は、神奈川近代文学館と武者小路実篤記念館で閲覧可能である。

『友情』という実際の出版物によって、1921（大正10）年4月から、下出書店は活動していたことが確認できる。ここで注目すべきは、1921（大正10）年4月14日付『東京朝日新聞』⁴⁰に『友情』の出版広告が掲載されており、そこには、第五版となっていることである。第五版まで版を重ねていったのであれば、初版本の発行日まで創業開始日が遡ることが可能であり、1921（大正10）年4月以前から活動していたことになる。しかし、当時頻繁に行われていたようだが、版の途中で発行者のみが変更となる場合は、版を初版から始めるのではなく、連続して数えるということが行われていた。初版から第四版までは以文社、第五版が下出書店、第六版からは叢文閣で出版されたのである。

以上のように出版物の発行状況から創業日を推測すると、下出書店は1921（大正10）年4月から活動を始めたということになる。

このように、未だ下出書店創業時を特定できる確たる記録は存在しない。しかし、いくつかの記録から推測できる創業時を検討した。今後、本人の記述や公文書の発見により下出書店の創業時期が確定できればと考えている。

4. 下出書店の事業内容について

(1) 古書販売業と貸本業

次に下出書店の事業内容について検討してみたい。従来まで下出書店は、書籍の出版事業のみを行っていたと考えられてきた。この章では、その言明は適正であるかを検討してみたい。

1921（大正10）年4月14日付『東京朝日新聞』⁴¹ 広告に、次のような記述が見受けられる。

新古本通信売買仕候

古本注文者は定価の約5割を前金送付のこと 新出版物にても間もなく古本出づること多し 詳細返信料三銭封入お問合せを乞う 洋書も購入

この記事は、『友情』の出版広告欄に記載されているもので、古書を通信販売する旨の記述がある。また、洋書まで扱うという幅広い事業展開を宣伝している。一週間後と、20日後にも広告の掲載があり、4月14日の広告より更なる事業をしていることが示される。

新古本通信売買読書会 会員募集

本が安く買える、自由に探せる、研究の□□になる、僅かの見料で沢山本が読める。地方読書家への機関

1921（大正10）年4月21日 『東京朝日新聞』⁴²

会員募集

書籍回読会

僅かの見料で本が読める会

通信売買の注文にも応ずる会

1921（大正10）年5月5日 『東京朝日新聞』⁴³

古書販売に加え、貸本業も行うとの記述である。僅かな賃料で本が読めるという謳い文句である。また、なかなか書物を手軽に手に入れることが出来にくい地方の読者層にも便宜を図るとの告知もしている。

この三つの記事によって、下出書店は従来の認識とは違い、出版事業とともに、古書販売と貸本業も事業としておこなっていたことが判明できる。

確かに大正期の出版社は、古書販売業や貸本業から出発することが多い。岩波書店も三省堂も古書店として誕生し、その後、出版事業へと事業展開していった組織である。古書店や貸本屋は、明治・大正期には数多く存在し、読書をする手段として利用することも多かったのである。特に貸本屋は、今では廃ってしまい、ほとんど目にすることはないが、手軽に利用できるという点では重宝する存在であった。石井研堂が『独立自営営業開始案内第二編』⁴⁴⁾で、新古書籍業、貸本業の事業を起業するためのノウハウを紹介する本も出版しているように、新しい事業として、古書店や貸本屋を選択する人も多かったのである。それほど書物も高価で、新品を購入して手元に置くということは、一般の人にはなかなかできない時代だったのである。参考までに、『独立自営営業開始案内第二編』に記載されている貸本屋の賃料(見料)は、一冊一円の新刊書の場合、2日で6銭、3日で9銭、5日12銭、10日で22銭が一般的であると紹介されている⁴⁵⁾。数多くの貸本屋が栄えていたが、大正後期になると急速に減少する。1923(大正12)年の関東大震災によって、貸本屋の蔵書が火災によって焼失し、再購入して品揃えすることができず、廃業の憂き目にあう貸本屋も多かった。それと相まって、公共図書館の充実や、図書全般の発行部数の増加による価格の低下によって、簡単に人々が書物を手にすることができるようになったということも貸本屋の数が減ることに加速させたのである。

下出書店も古書販売、貸本業の事業を手始めに、出版業にと事業展開をしていったのであろう。そして、他の貸本業者がそうであったように、広告での告知が全く掲載されなくなることから、関東大震災前後に、貸本業・古書販売業からは撤退したのかもしれない。

(2) 下出義雄が下出書店を始めた所以

では、なぜ義雄は、事業として下出書店の経営をしようと思いついたのであろう。その第一として考えられるのは、義雄自身は研究の道に進むことができないが、何らかの形で学問に近い分野で関わってみたいというのが理由ではないだろうか。義雄は「学者になりたい義雄」⁴⁶⁾、「その俊敏明晰な頭脳は、故福田徳三博士あたりから学徒として立つことを勧められたといふ位だから相当のものである」⁴⁷⁾という表現もあるように、研究者として学問を続けることを望んでいた。一方、父・民義は、長男である義雄に自分が手掛けてきた事業を継承して欲しいと願っていた。「もともと息子が、本屋なんぞをやって居るのは気に喰わない、これを本意なく眺めてゐた父親民義翁は、彼を無理にも引戻して、自分の睨みの利く名古屋紡績の専務さんにしたわけであった。」⁴⁸⁾とある。父・民義は出版社の経営に不満をもっていたという表現ではあるが、名古屋に帰って事業を継ぐことをせず、東京に居続けることに対しての不満であったという含みも感じ取ることができる。おそらく義雄も、いずれ名古屋に帰ることを覚悟したに違いない。それであれば、自分ではない誰かの研究の役に立ちたい。

そういった願いが出版社経営に込められていたのではないであろうか。また、義雄自身は、学生時代に多くの書物を所有していたということが推測できる。後年の義雄のことを記したものであるが、

学者型の下出君であるから、実業家としては、珍しい読書家であり、勉強家である。専門の経済史は勿論のこと、新刊といふ新刊は片ツ端から読破して行く。そのために彼は有象無象が襲って来る本宅の訪問者を避けて市内某所に読書勉強のための、借家住ひをしていると言はれる程だ。その読書と該博なる智識は、硬軟そして東西古今に亘って居るが、名古屋に於ける実業家としては実に珍しいものである。⁴⁹⁾

名古屋の実業家の中では珍しいぐらいの読書家という評価であり、また、本宅では置ききれない蔵書が別宅には置いてあったのである。出版社経営を自分の意志で選択するぐらいだから、若いときから読書家であったという点は否めないであろう。一橋時代にも、恵まれた学生生活を送っていたはずなので、沢山の本を所有していたと思う。この蔵書を、研究、学問をしたいが、経済的に余裕がない人に安く提供しようと考えたのではないであろうか。また、「地方読書家への機関」と下出書店をたとえている。自分がもし名古屋に帰った場合、恐らく現在同様に書籍を手に入れる機会はなくなるであろう。そういった地方で学問をしたい人に、都会でしか手に入らない書籍を提供したい。そういった願いが込められたのが下出書店だったのではないであろうか。

また副次的なものとして、父親の民義からは、帰ってきて事業を継ぐようにということは、当然長男だから言われていたのである。大量にある本をどうするか。名古屋への帰還準備のために、研究をしたい人に役立たせて、且つ減らせることができる。これが古本屋、貸本屋、出版業であったのではないであろうか。

研究で身を立てたい義雄の欲望と事業で身を立ててほしい父・民義の願望。この葛藤を他に転嫁するにはどうしたらよいか、その答えが古書籍販売業、貸本業、出版業の下出書店の経営だったのではなかろうか。城山三郎も下出書店経営の経緯を「学者になりたいという義雄の希望と、実業界に立てたいと思う父民義の願いがこうした形に妥協したとみられる」⁵⁰⁾と分析している。まさしく、その通りだと思う。

(3) 岩波書店との共通点

下出書店が古書販売業、貸本業を兼ねた出版社であったということが判明した。では、世間での下出書店の受け止め方はどうだったのであろうか。

併し、この岩波書店の向こうを張ったような、そして更に非営利的な出版事業は、当然六、七萬圓からの損失を招いたわけであるが、士族の商売は昔から相場が定まってる⁵¹⁾。

「この岩波書店の向こうを張ったような」とあるように、岩波書店と事業形態に相似点があるとの評がある。明治の博文館、大正の岩波書店と言われるように、大正時代を代表する出版社として一番に挙げられるのが岩波書店である。この岩波書店とどのような共通点があったのであろうか。

岩波書店は1913（大正2）年、岩波茂雄によって創業し、その歴史の始まりは、古書店か

らであった。創業の翌年に夏目漱石『こゝろ』を刊行したのを皮切りに活発な出版活動を展開し、1927（昭和2）年には古今東西の古典の普及をめざして「岩波文庫」を、さらに1938（昭和13）年にはアクチュアルな問題に焦点をあわせた「岩波新書」を創刊した出版社である⁵²。

確かに、下出書店と岩波書店には数多くの共通点が見受けられる。下出書店も前章で述べたように、古書籍販売、貸本業として開業しており、岩波書店も古書店からスタートしている。岩波書店が飛躍するのは、1914（大正3）に、夏目漱石の「大正三年四月から八月にわたって東京大阪両朝日へ同時に掲載された小説」⁵³を『こゝろ』として刊行し、その後『漱石全集』を手掛けて人気でたことである。同様に、下出書店も1919（大正8）年10月から12月まで『大阪毎日新聞』夕刊に連載された武者小路実篤著『友情』を、1921（大正10）年に発刊している。また、岩波書店が「岩波文庫」、「岩波新書」を次々と刊行していくが、下出書店が、「新生会叢書」という安価なシリーズ本を発売したのは、1921（大正10）年6月で、先立ってのことである。

古書店からの出発、夏目漱石『こゝろ』と武者小路実篤『友情』、叢書など、岩波書店と共通点も多く比較検討されたことはうなずける。ただし、大正時代を代表する書店という評価が今の主流である岩波書店と「向こうを張」ることができたかは疑問が残ろう。

5. 下出書店の廃業

(1) 義雄から弟・隼吉へ

廃業時期を説明する前に、いつの時点で義雄から隼吉へ経営をバトンタッチしたのかについて少し考察してみたい。それと言うのも、義雄自身の経歴を眺めてみると、1916（大正5）年に、大同電気製鋼所に就職、同年に木曾川電力の支配人、翌1919（大正8）年3月には矢作水力発電会社に入社、1920（大正9）年10月に名古屋紡績会社専務取締役役に就任している⁵⁴。この経歴を考えると、下出書店に対する業務を、義雄がしていたとは到底考えられない。そこで、推測しうる移譲時点を考察していくことにする。

1924（大正13）年5月から月刊誌として発行される『社会学雑誌』では、奥付は総て義雄から隼吉に変更している。隼吉が設立に尽力した日本社会学会の機関誌ということでもあり、そこで完全なる移行が行われたと思われる。しかし、発行者として義雄の名が記されていても、それ以前に移行していた可能性もある。

その可能性の一つが、時任為文『隠れたる木曾の奇勝恵那峡』が発行された1922（大正11）年7月21日以降である。現在確認できている下出書店出版書籍全56冊の内、この一冊のみが、印刷所が名古屋市中区裏門前町三丁目十九番地である。名古屋で印刷をしたとなれば、義雄は在名していたと推測できる。特に木曾恵那峡のことを取り上げた本である。名古屋電燈、木曾川電力の関係で知り合った人物の著作を出版したということは、大いにあり得る。裏を返せば、義雄が下出書店の発行人として手掛けた最後の仕事だと言えるのではないだろうか。そして、次の神近市子『島の夫人』からは、隼吉がてがけたのではないであろうか。

もう一つの可能性が、藤原勘治『新聞紙と社会文化の建設』が発行された1923（大正12）年7月19日からである。『新聞紙と社会文化の建設』奥付で際立つのが、今までの出版物と

のレイアウトの違いである。それまではシンプルな一般的なものであったのが、波線の装飾模様で内容を枠として囲んだ奥付となっている。もちろん印刷所が成武堂という初めての業者が印刷したということもあろう。それまでの下出書店の出版物は、東京市芝櫻川町二十番地 浅野榮作（株式会社大高印刷所印行）、東京市京橋區築地二丁目 川崎佐吉（川崎活版印刷所）、東京府京橋區南金六町十二番 望月精矣（英文通信社印刷所印行）がほとんどであった。その従来の印刷所ではなく、新規に成武堂を採用したのである。そして、繰り返しとなるが、『社会学雑誌』の発行に尽力をしたのは隼吉である。『社会学雑誌』は、義雄ではなく、隼吉が発行人として名を連ねた雑誌である。『社会学雑誌』の印刷すべてを担当していく成武堂が『新聞紙と社会文化の建設』であったということは、義雄が発行人として奥付に名前が記載されていても、実際に動いたのは隼吉の可能性は大いにある。

それに加えて、『新聞紙と社会文化の建設』の著者が藤原勘治だという点も義雄ではなく、隼吉が下出書店の中心的な役割を果たしていたと推測させる。藤原勘治と隼吉は東京帝国大学時代に、机を並べた仲である。隼吉が亡くなったとき、死亡広告が掲載されるが⁵⁵⁾、総代として名前が掲載されているのが、藤原勘治である。もちろん『下出隼吉遺稿』で「心友、下出君」⁵⁶⁾で友人の死に憔悴した様子から隼吉と藤原勘治の親密な間柄がうかがい知れる。そして『社会学雑誌』の編集を藤原勘治が担当したということも論拠となろう。1926（大正15）年9月までの『社会学雑誌』すべてが「編集者 藤原勘治、下出書店 発行人 下出隼吉」のタグで続いていく。ならば、『社会学雑誌』発行直前の『新聞紙と社会文化の建設』も藤原と隼吉のコンビで手掛けた可能性は大いにある。

義雄も、大同電気製鋼所、木曾川電力、矢作水力発電会社、名古屋紡績会社など、すでに名古屋で多くの事業に関わっている。実際に事業に携わり、就労していたかは、不明である。しかし、まったく名古屋でのこれら事業に対して、名前だけの取締役として無責任な行動をとっていたとは考えにくい。そのため、義雄が発行人として名前を連ねている出版物であっても、かなり以前から隼吉が加担していた出版物も多くあるのではないであろうか。

（2）下出書店の終焉時期

最後に、下出書店の名前が全く公から消失するのは、いつであろうか。1924（大正13）年9月から恒常的に『東京朝日新聞』に『社会学雑誌』が発刊される旨の広告が掲載され、1926（大正15）年9月まで継続する。1926（大正15）年10月からは、広告は一切掲載されなくなる。では実際の『社会学雑誌』の奥付記載はどうであろうか。やはり、1926（大正15）年9月の発行所は下出書店と記されているが、翌10月号では、下出書店の文字は消えている。

恐らく『社会学雑誌』の発行所に下出書店の名前が使用されるのみで、何ら他の活動をしていない現状にあって、下出書店存続の意義は全くなくなったからという考えもあったのであろう。また隼吉は1927（昭和2）年4月に東京帝国大学経済学部経済学部に31歳にして再入学する⁵⁷⁾。現在までの社会学の研究に厚みを増すために、経済学の研究にも手を広げることを行っている。『社会学雑誌』の発行手続のみとしても、研究に専念するためには、下出書店の副業は困難と考え閉鎖へと向かわせたのであろう。

新聞広告と、『社会学雑誌』奥付、この両者から下出書店は、1926（大正15）年9月をもっ

て終焉したと推測できよう。

6. おわりに

義雄によって創業した下出書店は、古書籍販売業と貸本業そして出版業を中心に始動した。1921（大正10）年から1923（大正12）年までのわずか2年余の間に、56冊の出版をし、全盛期とも言える時期を迎えた。しかし、1923（大正12）年9月の関東大震災によって、下出書店は火災にあい、出版物と拠点の焼失という下出書店閉鎖の危機に見舞われる。そして『社会学雑誌』のみの発刊という形で、細々と経営を継続していく。その活動も1926（大正15）9月で終えることになり、下出書店は終焉を迎えることになった。まさしく線香花火のような事業であったと言えよう。

しかし、下出書店という事業は、単なる出版社ではなく、義雄、隼吉のそれぞれにとって大きな影響を及ぼした事業であったといえる。

義雄にとっては、実業界に踏み出す第一歩目の経営であり、その後の名古屋での数々の事業にとって、下出書店の経験が有用であったことは紛れもない。関東大震災という大惨事で、出版物や拠点を失い、「非営利的な出版事業は、当然六、七萬圓からの損失を招いた」という経験は⁵⁸⁾、経営者としての度胸や動揺しない精神を養うことにもなったであろう⁵⁹⁾。

また隼吉にとっては、『社会学雑誌』の発行で、他の社会学者や多くの知識人と意見を交わす機会も増えたのではないだろうか。父・民義が「資本は私からである。東京帝大文学部に在学した次男隼吉の頼みで、隼吉が関係していた日本社会学会の機関誌発行の経費を出した。ついで明治文化研究会にも援助した。日本社会学会は、東大の社会学教室に籍は置いたが仕事は一切隼吉宅で行った。事務所を隼吉宅に置き、事務員の給料もこちらで払った。」⁶⁰⁾と述べているように、息子の研究の為の金銭面での援助を惜しみなくしていることが示されている。隼吉の葬儀には、尾佐竹猛や吉野作造ら著名な人物が弔辞を述べている。こういった人物との交流は、もちろん優れた学者としての隼吉の実力もあるが、下出書店という媒介が一役を買った部分もあったであろう。

これまで、資料も少なく謎に包まれた部分が多い下出書店に関して、現在確認できることを組み立てることによって分析してきた。まだ下出書店の骨組みとは言えないが、多少なりとも形を描くのに貢献できたのではないかと感じている。今後、新資料の発見により、さらなる新しい下出書店像を立証できればと考えている。

末尾となったが、本研究を行うにあたり、有益な御助言を賜った愛知東邦大学地域創造研究所 森靖雄氏に心より感謝し、お礼申し上げます。

註

- 1) 『東邦学園下出文庫目録』愛知東邦大学地域創造研究所、2008.7。
- 2) 愛知東邦大学地域創造研究所編『戦時下の中部産業と東邦商業学校：下出義雄の役割』唯学書房、2010.3。
- 3) 小松史生子／編著『東海の異才・奇人列伝』風媒社、2013.4。
- 4) 森靖雄「名古屋圏における工業近代化期の課題と経過（II）：下出民義・義雄父子の役割を中心に」愛知東邦大学、『東邦学誌 37（2）』、2008.12、pp.43-67。
- 5) 東京商科大学編『東京商科大学卒業生名簿』東京商科大学、1941.11、pp.68-69。

- 6) 人物評論編輯部『時代を創る者』人物評論社、1938.11、p.15
- 7) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 13 東京都』角川書店、1978.10、p.51。
- 8) 古くから名古屋に住んでいる住民には、錦二丁目と言われてもなかなか場所を思い浮かべることができないが、長者町と言われると織維街と思い浮かべることができるのと同じであろう。
- 9) 1920（大正9）年1月22日、『東京朝日新聞』。
- 10) 1920（大正9）年2月21日、『読売新聞』。
- 11) 1933（昭和8）年4月2日、『読売新聞』。
- 12) 『人格主義の否定』社会理想社 1923.5。
- 13) 『社会主義の価値哲学』聚芳閣 1924.11。
- 14) 『東邦学園下出文庫目録』愛知東邦大学地域創造研究所、2008.7、pp.409-410。
- 15) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第11巻』吉川弘文館、1990.09、p.950。
- 16) 前掲『東京商科大学卒業生名簿』pp.68-69。
- 17) 下出文庫は、義雄が所蔵した書籍が中心であり、今後、義雄の遺品から住所の記載ある書簡の発見が望まれる。
- 18) 1906（明治39）年9月12日、『読売新聞』。
- 19) 1897（明治30）年3月4日、『東京朝日新聞』。
- 20) 佐藤忠男著『日本映画史 I』岩波書店、1995.3、pp.98-97。
- 21) 1918（大正7）年8月21日、『東京朝日新聞』。
- 22) 城山三郎『創意に生きる 中京財界史』文芸春秋、1994.7、p.241。
- 23) 藤原勘治『心友 下出君』（下出民義『下出隼吉遺稿』下出民義、1932.04、p.762）。
- 24) 内閣府報告災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 平成18年7月1923 関東大震災第五章第二節表5-6 区別焼失面積、p.174。
- 25) 鈴木淳『関東大震災：消防・医療・ボランティアから検証する』ちくま書房、2004.12、p.64、「焼失地域と消防署」より。
- 26) 前掲『創意に生きる 中京財界史』によると「三階建てのビル」という表現があるので、レンガ造、コンクリート造など耐火性をある程度備えた建物であったかもしれない。
- 27) 東邦学園九十年誌編集委員会『下出民義自傳（注解版）』（『東邦学園九十年誌』別冊（尾崎久彌〔原編〕）学校法人東邦学園、2013.10、pp.49-50。
- 28) 「囲碁のポータルサイト日本棋院」<http://www.nihonkiin.or.jp/>（参照日 2015.01.16）。日本棋院は、1924（大正13）年7月17日に創立され、総裁・牧野伸顕、副総裁・大倉喜七郎が就任し、大倉の経済的援助によって、1926年（大正15年）に4月に、「東京市麹町区永田町二の一」に会館が建設され、当時のほとんどの棋士が参加した組織である。
- 29) 下出民義『下出隼吉遺稿』下出民義、1932.04 には、隼吉の経歴とともに、論文等も紹介されている。
- 30) 前掲『下出隼吉遺稿』p.731。
- 31) 『東京朝日新聞』1931（昭和6）年5月17日「5月15日 午後八時三十分、麹町区永田町二丁目一番地の自宅に於て急逝す。」。
- 32) 前掲『東邦学園下出文庫目録』pp.409-410。
- 33) 「下出義雄」北山米吉『財人研究 此の人を見よ』協同出版社、1936、p.270。
- 34) 前掲、森「名古屋圏における工業近代化期の課題と経過（II）：下出民義・義雄父子の役割を中心に」。
- 35) 1944（昭和19）年2月18日『日本産業経済新聞』（神戸大学電子図書館システム 新聞記事文庫）。
- 36) 前掲『財人研究 此の人を見よ』p.270。
- 37) 『東邦学園下出文庫目録』愛知東邦大学地域創造研究所、2008.7、p.409。
- 38) 脚本家の野島は、杉子に恋をする。友人である新進作家の大宮は恋の成就のために助力することを約束する。しかし大宮に心惹かれる杉子は野島の愛を拒否し、パリに去った大宮に心を寄せる。野島は失恋の苦しみに耐え、仕事の上で大宮と競い合っとうと心に誓う青春小説である。新潮社（参照日 2015.01.16）<http://www.shinchosha.co.jp/book/105701/>。
- 39) 武者小路実篤記念館館報『美愛真』5号 2003年10月1日発行、http://www.mushakoji.org/saneatsu/kansho/kansho_005.html（参照日 2015.01.16）。
- 40) 1921（大正10）年4月14日『東京朝日新聞』。
- 41) 1921（大正10）年4月14日『東京朝日新聞』。
- 42) 1921（大正10）年4月21日『東京朝日新聞』。
- 43) 1921（大正10）年5月5日『東京朝日新聞』。
- 44) 石井研堂『独立自営営業開始案内第二編』博文館、1914.4。
- 45) 前掲『独立自営営業開始案内第二編』p.200。
- 46) 前掲『創意に生きる 中京財界史』p.241。
- 47) 高島耕二『中部財界人物我観』蓬萊書房、1937.2、pp.88-89。
- 48) 前掲『下出民義自傳（注解版）』pp.49-50。
- 49) 前掲『財人研究 此の人を見よ』p.284。

- 50) 前掲『創意に生きる 中京財界史』p.241。
- 51) 前掲『財人研究 此の人を見よ』p.270。
- 52) 「岩波書店の歩み」<http://www.iwanami.co.jp/company/index.html> (参照日 2015.01.16)。
- 53) 夏目漱石『こゝろ』岩波書店、1914.9、「初版本序文」。
- 54) 『東邦学園下出文庫目録』愛知東邦大学地域創造研究所、2008.7、p.409。
- 55) 『東京朝日新聞』1931 (昭和6)年5月17日。
- 56) 前掲『下出隼吉遺稿』pp.761-771。
- 57) 前掲『下出隼吉遺稿』p.734。
- 58) 前掲『財人研究 此の人を見よ』p.270。
- 59) 名古屋紡績の事業で、紡績糸相場で約7万円の損失を出し、それでも動揺しなかったことは、こういった経験が生かされたのであろう
- 60) 前掲『下出民義自傳 (注解版)』p.49。